

<研究動向>

音楽フィグーラの認知と着目

徳 留 勝 敏

東亜大学 人間科学部 心理臨床・子ども学科
tokudome@toua-u.ac.jp

現在の多くの音楽は、対位法と和声法の理論を備えて楽式つまり音楽を展開する形式に沿って構成されている。標準音楽辞典（音楽友之社）によると、対位法は9世紀頃に複数の旋律を用いた書式であるオルガヌムが源泉である。和声法は和音の進行を理論としたもので、1722年にフランスの作曲家ラモアの「和声概論」によって纏められた。楽式は音楽の展開を示す諸形式であると掲載されている。そして、これらの理論は音楽の変化と共に拡張され、音楽の創造の基盤となっている。しかし、対位法や和声法が出現する以前にも音楽は存在する。明らかになっている音楽だけでも理論が確立された10数世紀前から多彩な音楽が存在していた。そこには「音楽フィグーラ」と呼ばれる音楽を創造する手段が存在している。その「音楽フィグーラ」に着目した研究の動向を紹介したい。

磯山雅「バッハ＝魂のエヴァンゲリスト」（東京書籍、1985年4月1日発行）の音楽と修辞学の項目に、音楽は文章を書き演説することに類比する。音楽は一種の弁論にほかならない。音楽の構成は、弁論における配置に倣う。そして、最も興味深いのは種々の音楽的修辞フィグーラの存在であると書かれている。さらにフィグーラとは、弁論や文章に効果的な言い回しで飾ることを意味し「文彩」とも訳されると説明もしている。そしてこの概念は17世紀初めに音楽理論に取り入れられ、楽節を飾る音型をフィグーラと呼ばれるようになった。そして理論化されたフィグーラ理論（フィグーレンレール）は、理論書と口伝によって教えられ、ド

イツバロック時代の音楽家たちには欠かせない素養となった。その例としてバッハのヨハネ受難曲よりソプラノ・アリア「融けて流れよ、わが心よ」で種々の音楽フィグーラの存在を明らかにしている。

ニューグローヴ音楽大事典第8巻（講談社1995年4月20日発行）「修辞学と音楽」の項目には、音楽修辞学の概念が示されている。音楽創作の手引きを序論、本論、結論と弁論術の区分に基づく音楽形式構成となし、作曲プランを着想、構成、装飾、彫琢（表現）として概念を示している。まだ和声法や対位法が確立していない時代、マッテゾンなどドイツバロック時代の作曲家は、修辞学の規定が作曲を進める常套的な技法であったと高い認識を持っていた。また音楽フィグーラについて約160の異なった形のフィグーラの存在を知らせ、カテゴリー別に1. 旋律反復のフィグーラ、2. フーガ模倣に基づくフィグーラ、3. 不協和音構造に基づくフィグーラ、4. 音程のフィグーラ、5. 形象模写のフィグーラ、6. 響きのフィグーラ、7. 沈黙（休止）のフィグーラと7つのカテゴリーに分けて具体的に楽節を挙げて説明している。多くの音楽フィグーラは、現在の対位法の書き方からすると規定から外れているものがあるが、これは歌詞の情念的な表現を劇的なものとしているためである。修辞学の原理と音楽を結びつけた情念の表現の目的は、人間の情念を模倣することにあつたとある。作曲家たちは弁論家と同様に、聴衆の中にイデア化された悲しみや喜びなどの感情の状態を音楽として反映させ

ようとした。

まだ文字が大衆化されていない BC500 年頃～400 年頃の間、古代ギリシアの 3 大詩人アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスによる優れたギリシア悲劇には、修辞学が音楽と関係する技法が多くあると推測される。その後 BC300 年後半ごろから、古代ギリシアや古代ローマの著述家たち、とりわけアリストテレス、キケロの弁論術や修辞学に関する文献が音楽と関わり、音楽概念の起源となった。そして、修辞学と音楽との深い結びつきは 16 世紀頃まで続いた。音楽フィグーラなど音楽修辞学の諸概念は 1730～40 年（バロック終焉期）の音楽理論や音楽用語において存在は大きいものであった。そしてこの時期、音楽フィグーラを構成要素に持つ膨大な音楽から規則性を見出し纏めた結果、和声法や対位法そして新しい楽式などが確立をしたのである。そして作曲の技法は、和声法などの理論が主流になると、修辞学的な音楽フィグーラは 18 世紀に衰退した。つまり現在の音楽は、構成要素である和声法や対位法が楽式によって展開されている。その構成要素や楽式の源が音楽フィグーラであり、修辞

学的な要素を持つ音楽に起源を持っている。そして、音楽フィグーラは 18 世紀に衰退してしまった。

衰退した結果、音楽フィグーラの存在すら忘れ去られてしまったため、音楽フィグーラに視点を定めた研究は少ない。その中、教育の分野に磯部哲夫「幼少接続期における修辞学的音楽解釈を取り入れた歌唱研究」（郡山女子大学紀要第 55 号）の論文は、カテゴリー別のフィグーラによる楽曲の分析を幼少期の歌唱教材を対象に論じている。堀江英一「音楽修辞フィグーラ概念による小学校歌唱共通教材の表現法」（富山国際大学子ども育成学部紀要 第 2 巻）の論文では、小学校歌唱共通教材をカテゴリー別の音楽フィグーラによる楽曲分析を行っている。いずれの論文も楽曲の随所に音楽フィグーラを具体的に見出している。

現在、衰退してしまった音楽フィグーラに関する論文や著書は、音楽に関する他の理論的な内容などの事項に比べ非常に少ないと感じる。現在の音楽理論の基盤となった音楽フィグーラに関する研究の取り組みは、今後必要と考える。